難民・避難民展

展示とワークショップの場であるBE＊hiveでは、おおよそ2年ごとにグローバル共生に関わるテーマを設定しています。第1期のテーマは「難民・避難民」でした。ここでは、この大テーマのもとに半年おきに掲げられたトピックである「日本にいる難民・避難民」（第1期）、「中東の難民・避難民」（第2期）、「アフリカ・アジアの難民・避難民」（第3期）ごとに各々で掲示したパネルの内容をお伝えします。

～灯火（トーチ）を掲げる女性～ 私たちの先輩、緒方貞子さんを知っていますか？

「あなたたちは、鍋の底や皿を洗うだけの女性になってはいけません。」

© UNHCR/E.Brissaud

これは、聖心女子大学の初代学長で、アメリカ人のマザー・エリザベス・ブリット（1897 ～ 1967） が、学生たちに繰り返し語りかけていた言葉でした。これからの女性がどうあるべきか、そのためにどのような教育をすべきかについて、明確なヴィジョンを持った初代学長のもとで学んだ一期生のひとりが緒方貞子さんでした。

緒方さんは 1948 年に入学し、在学中は英文学を専攻しながら、学生たちにさまざまな分野を勉強させるというマザー・ブリットの方針のもと、社会科学や哲学なども広く学びました。

さらに、緒方さんは第一期生として学生自治会の会長となり、その活動の中で「自分の考えをしっかり持ち、みんなでアイディアを出し合い、議論し、物事を決め、確実に実行しなさい」というマザー・ブリットの指導から多くを学んだと語っています。ここで培われた彼女のリーダーシップが、重要なグローバル課題の解決のために発揮されました。

緒方さんは、国連難民高等弁務官（1991～2000 年）として難民問題の最前線で働き、多くの功績を残しました。その勇気ある活動は、国内外で評価され、インドのインディラ・ガンディー賞（2001年）やイタリア共和国功労勲章（2001年）、日本の文化勲章（2003年）ほかを受賞しています。

緒方さんにとって、聖心での学びがさまざまな困難を乗り越えるための基盤となったように、BE＊hive での学びも皆さんの知的・精神的な基盤となるよう、願ってやみません。

緒方貞子さん

1927 年生、国連公使、国連人権委員会日本政府代表、国連難民高等弁務官 JICA 理事長を歴任

Do you know Ms. Sadako Ogata, one of the first graduates of the University of the Sacred Heart?

“You should not be women only washing pots and pans”. .

This statement was often repeated by Mother Britt (1897-1967), the first president of the University of the Sacred Heart. Ms. Ogata, a student of one of the first graduating classes at the time of Mother Britt’s Presidency, was deeply influenced by her words and because of her, had a very clear vision of women's roles for the future society. Ms. Ogata also realized the kind of education required for women in order to take on these roles.

Ms. Ogata was admitted to the University of the Sacred Heart in 1948, majoring in English literature, as well as taking courses in philosophy and other social science courses, following Mother Britt's policy that students should study a wide range of areas. Ms. Ogata became the head of the student government and learned a lot from Mother Britt's guidance, including the importance of stating one's opinions, sharing ideas, discussing with fellow students, deciding on a plan, and implementing that plan. Needless to say, her leadership capabilities, which were nurtured on campus, became vital for her career, in which she addressed many serious issues, in her capacity as a global leader. This educational philosophy which Mother Britt instilled in Ms. Ogata and other students at that time continues still today, and represents the focal point of the BE*hive.

Ms. Ogata has contributed immensely to the refugee issue as the United Nations High Commissioner for Refugees (UNHCR, 1991~2000). She was conferred the Indira Gandhi Award from the Republic of India (2001), the title of Commendatore from the Republic of Italy, and the Order of Cultural Merit from Japan for her outstanding effort and courageous activities.

Just as Ms. Ogata built a solid foundation to face various difficulties on campus and during her career, we strongly hope that you will also develop your intellect, as well as spiritual foundation through learning at this BE*hive.

Sadako Ogata

Ms. Sadako Ogata, born in 1927, was Minister of Permanent Mission of Japan to the United Nations, United Nations High Commissioner for Refugees (UNHCR), and President of Japan International Cooperation Agency (JICA).

テーマ「難民・避難民」について

展示とワークショップの場であるBE＊hiveでは、おおよそ２年ごとにテーマを設定し、かつ半年ごとに小テーマを変えていきます。ぜひ繰り返し来訪してください。出会いと学びを深めていただくことを期待します。

オープンから2019年３月までの最初のテーマは、「難民・避難民」です。その期間は半年ごとに、小テーマを「日本にいる難民」、「中東の難民」、「アジアとアフリカの難民」に変え、それに対応した展示とワークショップを行います。本学の学生や姉妹校、卒業生や教職員たちが、こうした難民・避難民に関っていることがこれらを取り上げる理由です。

ここで私たちが皆さんに感じ取ってほしいと願っているのは、難民・避難民は遠い世界の「他人ごと」ではなくて、「自分ごと」であること。皆さんのすぐ隣にそうした人たちがいるかもしれないというだけでなく、近い過去の私たちがそれに似た状態だった、将来私たち自身がそうなる可能性がある、さらに難民・避難民を生み出している状況に私たちも関与しているかもしれない、といったことに気付く機会を提供します。

難民・避難民が「自分ごと」なら、そうした人々への支援も「他人ごと」ではありません。さらに難民・避難民が生じない、あるいは母国や故郷に安心して帰還できる平和を創りだす、そしてこの人たちを温かく包摂するグローバル共生を実現するための歩みを、ここから始めませんか？

“Refugees and Internally Displaced People”

The first theme of our exhibition space will be “Refugees and Internally Displaced People”, with sub-themes, including “Forcibly Displaced People in Japan”, “Forcibly Displaced People in the Middle East” and “Forcibly Displaced People in Africa and Asia”, which will be introduced in turn every five to six months. Our workshops and activities are based on this theme and sub-themes. This theme was selected as a number of our university students, sister schools, graduates, teachers and staff members are involved in this issue.

Through this theme and the activities connected to this theme, we aim to send the message that Refugees and Internally Displaced People are our own issue, not the issue of others. Not only because they are nearby to us now, but also because we were once in a similar situation several decades ago, and may once again be in the future. Furthermore, both you and I could be responsible for structural causes of global-forced displacement.

Let us begin to realize globally sustainable futures where no displacement takes place, and where the displaced peacefully return back home, and/or live together with us in harmony.

難民・避難民とは?

国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) によると、2016年末時点で国や自宅を追われた人は前年より少し増えて6,560万人、世界の人口の113人に1人という高比率です。

この6,560万人には3タイプがあり、いちばん多いのは自宅から追われたが自国内に留まる国内避難民で4,030万人、故国を離れた難民は2,250万人、そして他国で庇護申請をしている280万人です。この中には、今から70年も前の1948年、イスラエル建国とそれに続く第一次中東戦争で住居や故郷を失い、現在では500万人以上に上るパレスチナ難民も含まれています。

最近では地中海を渡る人々の悲劇が、しばしば報じられます。2016年には35万人以上が地中海を渡る一方、5,000人以上の人びとが命を落としました。2017年も7月時点で10万人以上が危険な航海を試み、死者・行方不明者は2,300人以上です。シリアでは、その人口の約3分の1の1,200万人もの人びとが避難を余儀なくされています。また南スーダンからも、多くの人びとが周辺国に逃れています。

世界で極めて大勢の人びとが、支援や保護を必要としているのですが、その84%は2016年末の時点で低中所得国に滞在しており、大きな負担となっています。一方シリアからの難民大量流出以降、欧米などの多くの先進国では難民に対する視線が厳しくなっています。

さて日本は現在、こうした人びととどう関わろうとしているでしょうか？

The definition of refugees and internally displaced people

According to the UNHCR, the number of forcibly displaced people worldwide in 2016 was 65.5 million. This means that one in every 113 persons was displaced. Out of this 65.5 million, 40.3 million were considered internally displaced people (IDPs), while refugees who left their own countries reached 22.5 million, including over 5 million Palestine refugees, and 2.8 million asylum seekers from various other countries.

Approximately 350,000 people crossed the Mediterranean in 2016, but more than 5,000 among them lost their lives. By July 2017, 100,000 people, including more than 2,300 died or went missing. Thus far, about 12 million, or one third of Syria's total population has been forced to leave their homes.

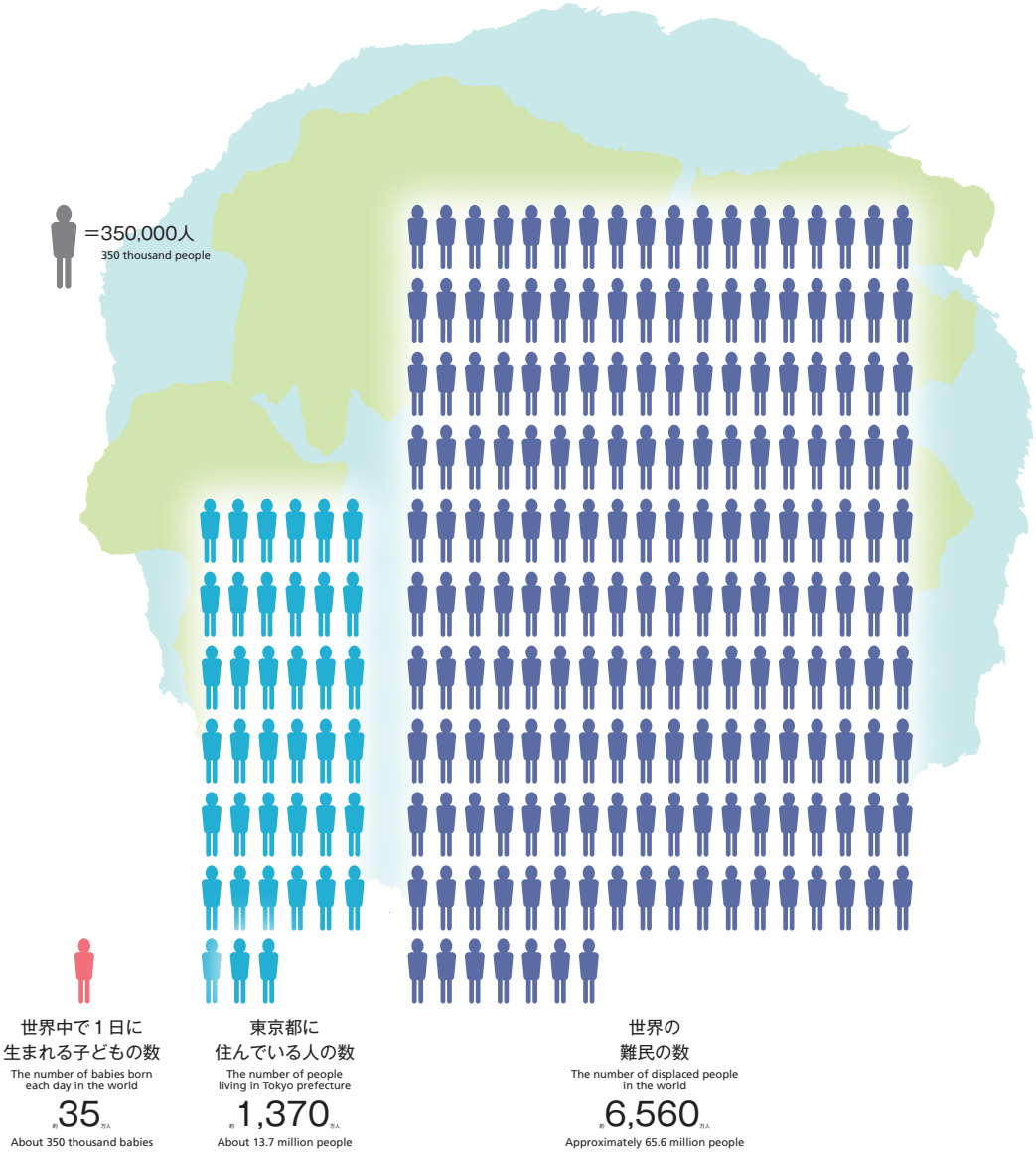
Countries with lower middle incomes are hosting 84% of these people, while countries with higher incomes are less tolerant after the massive exodus of refugees from Syria. What is Japan doing to support these refugees? Are we living together with them?

世界の約113人に１人が難民？

Is it true that 1 in about 113 people in the world is a refugee?'

世界の難民や難民申請者、国内で住居を追われた人の数の合計は 6,560 万人（2016 年末現在）、つまり世界では 113 人に 1 人が難民という計算になります。この数は、第 2 次世界大戦後で最多となりました。

The number of forcibly displaced people worldwide in 2016 was 65.5 million. This means that one in every 113 persons was displaced. This is the largest number since World War II.



日本にも難民はいるの?

Are there refugees in Japan?

毎年日本で難民として暮らし始める人の数

世界の難民の増加に伴い、日本でも難民申請をする人が毎年多くなっていますが、実際の認定数（青のマーク）はほぼ横ばい、世界でも極めて低い認定率となっています。一方で日本にも、たくさんの難民を受け入れていた時代がありました。ベトナム戦争終結後発生したインドシナ難民を、1万人以上受け入れてきたのです。

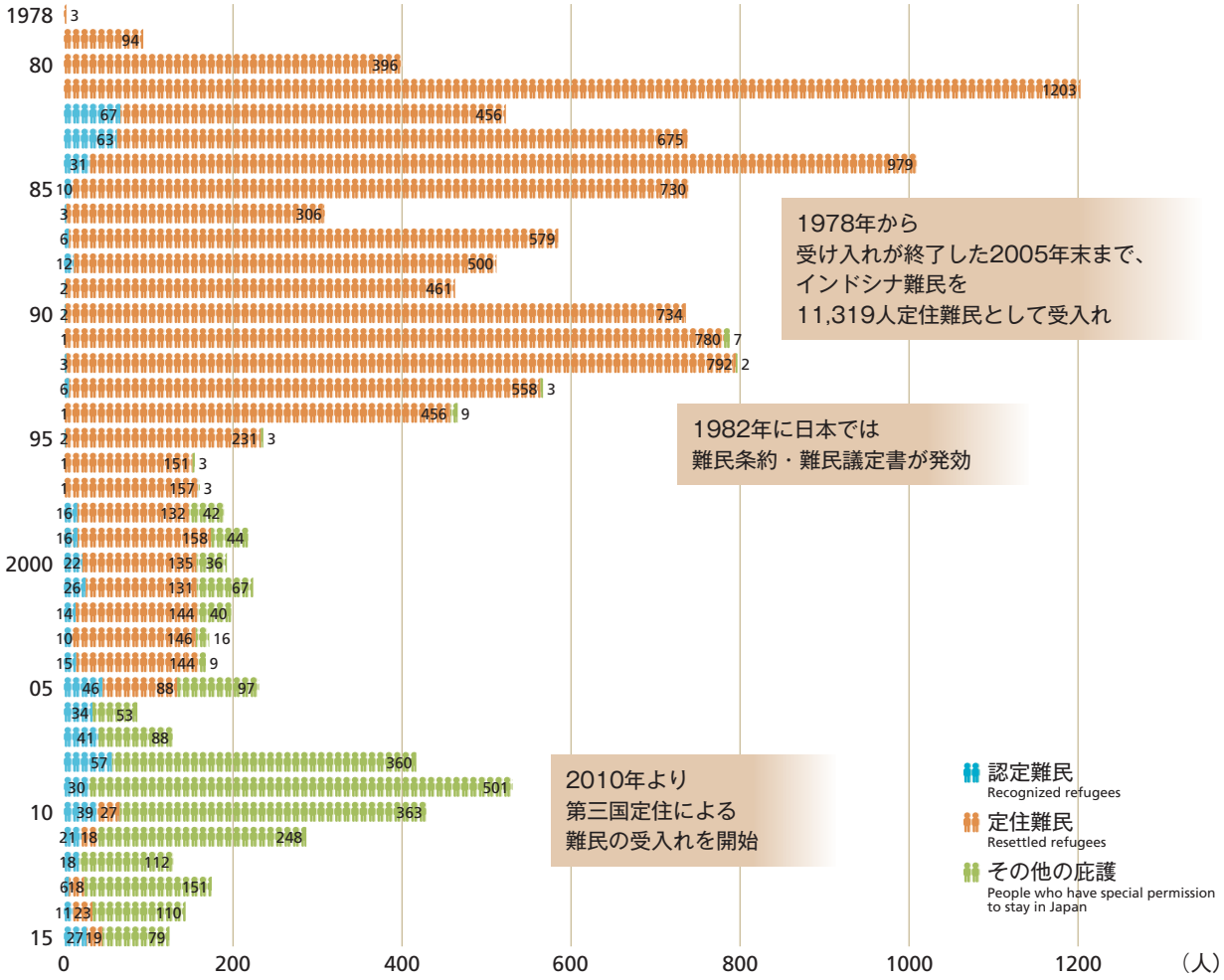
インドシナから来た人びとの多くは、神奈川県や兵庫県に住んでおり、今現在、日本では3万人以上の難民などが地域の人びとともに暮らしています。

The number of displaced people who come to live in Japan each year

Due to the increase of displaced people in the world, more people are applying for refugee status in Japan than in the past. However, the number of recognized refugees has leveled off. Compared to other countries, the rate of refugee recognition in Japan is quite low.

On the other hand, in the past, Japan accepted many refugees, more than 10 thousand Indo-Chinese refugees.

Most of them are currently living in Kanagawa or Hyogo prefectures, and now, more than 30 thousand displaced people live together with other people in Japan.



出典：法務省ホームページ※定住難民：インドシナ難民および第三国定住難民
※認定難民：入管法の規定に基づき、難民として認定された人
※その他の庇護：難民の認定をしない処分を受けた人のうち、在留特別許可または在留資格変更許可を受けた人

Sacred Heart Refugee Education Trust

学生だからこそできる難民支援って？

What refugee support can students do?

SHRET（シュレット）は難民支援を行う聖心女子大学公認の学生団体です。
第８代国連難民高等弁務官、緒方貞子さんが 2000 年に設立した難民教育基金（現在の RET International）の事務局長の来学を機に、2002 年に発足しました。

……　１人の学生として、市民として。
あなたにできることは何ですか？

伝える

『知る』から始まる難民支援

○出張授業

小学生から高校生を対象とした「難民」について学ぶ授業を実施しています。

○イベント運営

毎年6月20日の「世界難民の日」に合わせて、国連難民高等弁務官(UNHCR) 駐日事務所をはじめとしたさまざまな団体の協力のもと、難民問題について伝えるイベントを実施しています。2017年にはダライ・ラマ法王の実妹ジェツン・ペマさんらによる「チベットの民の知恵と経験」シンポジウムを開催しました。

学ぶ

『難民』を軸に多角的視点を養う

○勉強会

難民問題に携わる上で、必要となる知識を団体内で深めつつ、他の学生団体とも議論を重ねています。

○難民支援団体・企業へのインタビュー

難民支援を行う NGO や国際機関、企業を訪問しています。

○学生提案型授業

SHRET の学生の提案により、難民について学ぶ、半期の授業が実現しました。

最終回には、受講者一人ひとりが「私達にできることは何か？」を書き記し、１本の「希望の樹」を作りました。

○スタディツアー

2014 年度、スイス・ジュネーブにて国連難民高等弁務官（UNHCR）など、難民支援を行う国際機関を訪問しました。

寄り添う

日本社会でともに生きる

絵：増田京美

○日本語ボランティア

社会福祉法人「さぽうと 21」にて、在日難民の日本語支援・学習教室のボランティアをしています。

○被収容者との面会

東京入国管理局に収容されている難民申請者などと面会をしています。

○難民の人びととの交流会

難民の人びととの食事会などを通して、祖国や日本での暮らしについて学びます。

行動する

身近なところから、難民支援

○ Meal for Refugees（M4R）

「世界難民の日」に合わせて一週間、学生食堂で難民の故郷の料理を食べる Meal for Refugees（M4R）※を実施しています。

※認定 NPO 法人難民支援協会のプロジェクト

○衣料品回収

年に１～２回、学内にて衣服を回収し、集まった衣服を（株）ファーストリテイリングや他の団体を通して世界中の難民に届けています。

高校生が考える支援って?

聖心女子学院姉妹校５校の高校生交流活動

How do high school students learn about global issues?
Active learning in collaboration with the 5 Sister High Schools of the Sacred Heart in Japan.

このプログラムを一層発展させるために、私たちは何ができるのでしょう。

交流する

日本国内の聖心姉妹校５校で連携し、社会意識や国際意識の向上に努めながら高校生に可能な活動のあり方を考えるという目的のもと、1997 年に SOFIS※は発足しました。第１回・第２回のワークショップで SOFIS の目的や活動形態を確認し、第３回以降は各担当校が設定するテーマのもと､5 校代表者が集う２泊３日のワークショップを、年に一度、実施してきました。

「環境問題」「難民」「第三国定住」「外国人労働者」、また「多文化共生」「他宗教への理解」や「災害援助のあり方」など、地球市民として「共生」を生きる上で不可欠なテーマに取り組んできました｡事前学習のプレゼンテーション、フィールドワーク、講義、分かち合いなどを通して考えを深め、学んだことを各校に持ち帰り、それぞれの活動につなげるよう励んでいます。近年、ソウルや台北の姉妹校の生徒が参加していることは、聖心ならではといえます。

理解を深める

2017年8月には、「難民問題」をテーマに、第21回ワークショップが小林聖心女子学院高等学校（兵庫県）で行われました。シリア難民など緊急課題を抱える現代世界と向き合い、SHRET（聖心女子大学難民支援学生団体）によるセッション、施設訪問（神戸定住外国人支援センター・難民事業本部関西支部・RAFIQ（在日難民との共生ネットワーク)、また日本に定住しているアフガニスタン人女子大生の講話などを通して、難民に関する理解を深め、支援のために何ができるかを考えた３日間でした。

※姉妹校５校：S= 札幌聖心女子学院、O= 小林聖心女子学院、
F= 不二聖心女子学院、
I= 聖心インターナショナルスクール、S= 聖心女子学院

"SOFIS" was founded in 1997 as an organization based on the cooperation among the five Sacred Heart high schools in Japan. The main goals of SOFIS are to build and strengthen social awareness, and develop an international mind, so that students can take action on their own. Holding workshops is one of the ways to achieve these goals. The 1st and 2nd workshops were devoted to confirming objectives and deciding on the kinds of activities to embark on. From the 3rd annual workshop onward, representatives from the five schools gathered together for a 2-night 3-day workshop and discussed themes, selected by the host school of the year. The themes centered on critical issues connected to globalization in the age of coexistence, such as environment problems, refugees, refugee resettlement, migrant workers, multicultural symbiosis, understanding of other religions, and assistance to disaster victims.

Each year after the workshop, participating students go back to their schools and share what they learned and experienced from their preparatory studies, field work, lectures, discussions, and so on. They then apply this knowledge to their respective activities. In recent years, the Sacred Heart high schools of Taipei and Seoul have also joined the workshops.

The 21st workshop was held at Obayashi Sacred Heart School (in Hyogo prefecture) in August 2017. "Refugee Issues", including Syrian refugees, was the theme of this year, which represents one of the most serious and urgent problems in today's world. Through the workshops and programs, including sessions with the SHRET members (a university students' action group for refugees), visits to various institutions (eg. Center of Support to Foreigners Living in Kobe, Kansai Branch of Refugee Assistance Headquarters, and RAFIQ, a network for symbiosis with refugees in Japan), as well as a speech by a young female Afghanistan student living in Japan, students could deepen their understanding concerning complex issues surrounding refugees. Additionally, these programs also helped students to think about the most appropriate ways to support refugees.

(SOFIS refers to the initials of the names of five sister schools: S from Sapporo Sacred Heart School in Hokkaido, O from Obayashi Sacred Heart School in Hyogo, F from Fuji Sacred Heart School in Shizuoka, I from International School of the Scared Heart in Tokyo, and S from Sacred Heart School in Tokyo.)

聖心女子大学も難民を学生として受け入れるの?

2018 年度より、1 名を「難民高等教育プログラム」を通じて受け入れます。

協定書を持つダーク・ヘベカー UNHCR 駐日代表、岡崎淑子 本学学長、滝澤三郎 国連 UNHCR 協会理事長

日本の８つの大学が実施するUNHCR難民高等教育プログラム（Refugee Higher Education Program）は日本に住む、日本国籍を持たない難民が奨学金を受けながら日本の４年制大学で就学できるようにするものです。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）駐日事務所と、UNHCR の活動を支える公式支援窓口である NPO法人国連 UNHCR 協会が運営しています。

2017年７月14日、本学も協定を締結し、パートナー校として、難民を毎年１名受け入れます。授業料を含む奨学金は本学が負担します。難民支援活動の一助となると共に、本学が推進するグローバル共生に関する教育・研究につながることを願っています。

Is University of the Sacred Heart also going to receive a refugee as its student?

One student will join us from FY 2018 through the Refugee Higher Education Program (RHEP)

UNHCR's RHEP joined by 8 Universities in Japan is a supporting program of refugees living in Japan to study at four year universities with scholarships. This program is jointly managed by the UNHCR Japan office and the Japan for UNHCR.

Univ. of the Sacred Heart has inked an agreement to be a partner school of the program accepting one refugee every year from FY 2018. All costs for this will borne by this University. This will be not only a support to refugees, but also promote its education and research on global symbiosis.

What could we do to develop this program furthermore?

特別展

無国籍者とは?

Nowhere People : The World's Stateless

「国籍」とは人びとに、アイデンティティや幅広い権利を与えるものです。世界人権宣言には、「すべての者が国籍を持つ権利を有する」と書かれており、1961 年には無国籍に関する条約が発効しました。このように国籍を持つ権利は国際的に認められているにもかかわらず、現在、世界には少なくとも 1,000 万人の無国籍者が存在しています。

無国籍となる理由はさまざまです。国家の分裂や紛争後の国境線の引き直しにより無国籍になることもあります。また、国家間の法律の違いにより、国籍の異なるパートナーのもとに生まれた子どもが無国籍になることもあります。

無国籍であるということは、どの国からも国民と認められていないということです。人権や自由、生活を保障してくれる「国家」の後ろ盾がない無国籍者たちは、日常生活においてさまざまな困難に直面しています。例えば教育や年金、生活保護を受けられない、パスポートが手に入らず国外へ行くことができない。彼らは国籍がないことから社会の中で「見えない人びと」として存在しているため、こうした問題は表面化しにくいのです。

「見えない人びと」に、
あなたはどう手を差し伸べますか。

本展では BE＊hive 誕生特別企画として無国籍者写真展 'Nowhere People : The World's Stateless'を開催しました。学生有志*による企画写真展でした。

＊神田和可子、山中美友紀、髙橋海奏、増田京美、藤波里彩子